熊本国際建築展 くまもとアートポリス'96

総合記録

COLLECTION

KUMAMOTO

INTERNATIONAL

EXHIBITION

OF

ARCHITECTURE

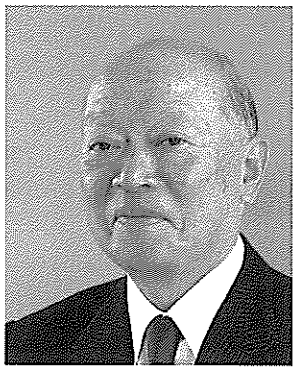
KUMAMOTO

ARTPOLIS '96

K·A·P

発刊にあたって

熊本国際建築展「くまもとアートポリス'96」実行委員会
会長　福島　譲二



「くまもとアートポリス」は、後世に残しうる文化的資産としての建造物を創り、地域活性化に貢献することを目的として、県内各地において進めてまいりました。この事業成果を国の内外に紹介するとともに、21世紀に向けた熊本の建築文化の更なる発展を願い、昨年8月から約4ヶ月間にわたって『熊本国際建築展「くまもとアートポリス'96」』を開催いたしました。

1992年に続いて2回目となる今回の国際建築展は「環境・文化・ひと　熊本の未来とアートポリス」をテーマに、これまでのプロジェクト参加総数56件に及ぶアートポリスの建造物が、生活文化創造の核として、地域の環境や文化や人々にどのような影響をもたらしているのか、そして今後どのように地域の活性化や建築文化の振興を図るべきかを考えていこうというものでした。

このテーマに基づき、多くの県民の方々に参加していただき、様々な取り組みを県内各地で展開しました。建築文化の発展を目的とした全国で初めての取り組みとして、多くの注目を集めてきた「くまもとアートポリス」が、地域や住民とともに生きつづけ、地域文化を華開かせるうえで、大きな役割を担っていることを更に多くの方々に理解していただくことができたのではないかと思います。

また、海外を含め県内外から、建築や地域づくりの専門家はもとより、多くの参加者を迎え、実り多い成果をあげることができたことは、アートポリスをはじめとする熊本の高い建築文化が評価されたものであり、そのような成果を情報発信できたことは喜びにたえません。

今回の国際建築展が、成功裡に終了することができたのはひとえに関係者の皆様の御尽力と御支援のおかげと感謝いたします。特に今回の企画が、地域の魅力づくりに日々取り組んでおられる方々の自発的な活動に支えられたことは、「くまもとアートポリス」が広い範囲の方々から愛されていることの証明でありました。この事業が県民の各層に浸透し、ひとつの文化運動として盛り上がる兆しを感じさせるものでした。

来るべき21世紀に向けて、日々の生活の喜びを実感できるような地域づくりにアートポリスの建造物が貢献できるように、今後とも着実な事業展開を図ってまいります。

『熊本国際建築展「くまもとアートポリス'96」』をまとめたこの報告書が、単にイベント内容を記したものではなく、新たな地域づくりの参考になるとともに、アートポリスの建造物をはじめとする県内の建築物が多彩な豊かさを実感できる郷土〝くまもと〟の実現に大きく寄与している様子を感じとっていただければ幸いと思っております。

CONTENTS

総合記録

KUMAMOTO INTERNATIONAL EXHIBITION OF ARCHITECTURE

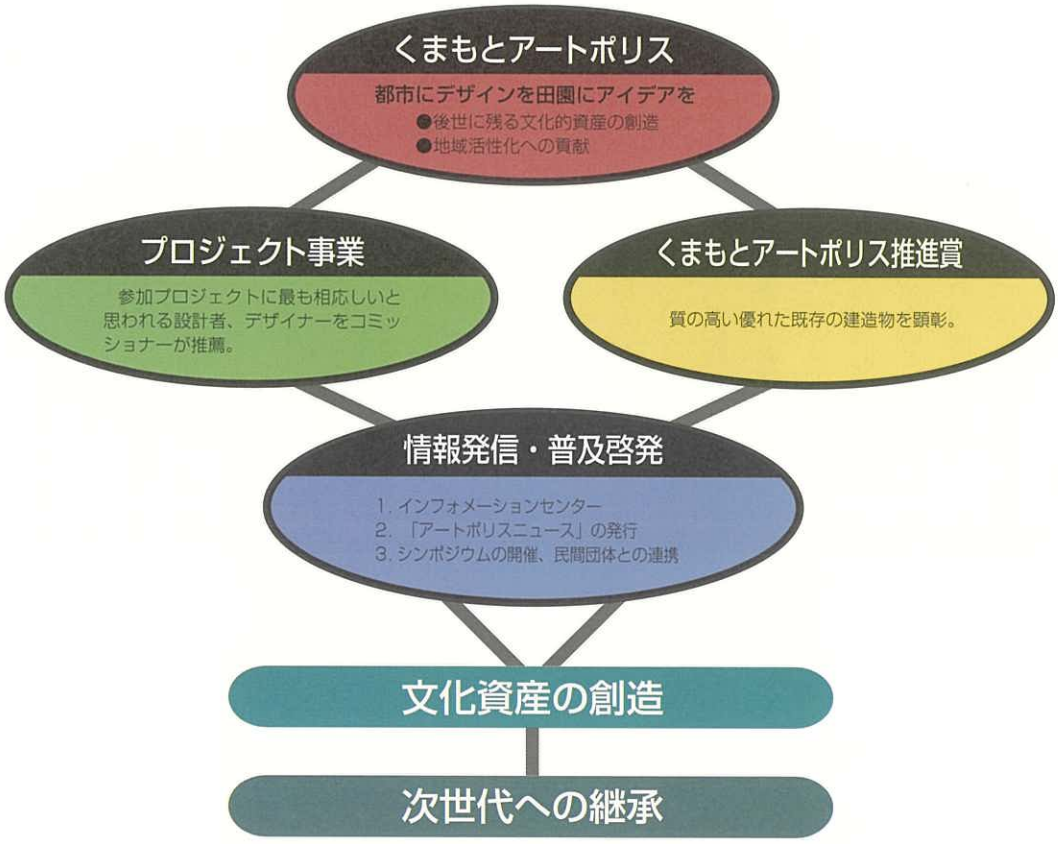
ARTPOLIS KUMAMOTO '96

巻頭特集　くまもとアートポリス'96夏休み見学ツアー…… 4
くまもとアートポリスプロジェクト…… 13
くまもとアートポリス第2期…… 14
くまもとアートポリス第1期…… 26
くまもとアートポリス選定既存建造物 …… 45
くまもとアートポリス推進賞 …… 52
くまもとアートポリス'96 …… 55
都市デザインサミット…… 56
熊本まちづくり展…… 66
山鹿まちづくり展…… 72
阿蘇まちづくり展…… 74
清和むらづくり展…… 76
泉むらづくり展…… 78
アートポリス展覧会…… 80
協賛事業、誘致会議…… 83
総　括…… 87
モニターの声…… 88
アートポリスフォーラム…… 92
総括メッセージ（堀内清治くまもとアートポリスアドバイザー）…… 104
参考資料…… 106
くまもとアートポリス'96実行委員会会則 …… 107
推進体制…… 108
実行委員会…… 109
実行委員会専門部会…… 110
まち・むらづくり展実行委員会…… 111
広報活動一覧…… 112
後援・協賛団体…… 113
編集後記　座談会「取材者が見たくまもとアートポリス'96」 …… 114

くまもとアートポリス
K·A·P

熊本の豊かな自然を生かし、地域の主体性と創意工夫によって優れた文化的資産を残していくこと。そして、そのことを通して、都市を田園をいきいきと活性化させていくこと。これがくまもとアートポリスの目標。

国際的な建築家やデザイナーの才能とアイデアを集めて出来上がったアートポリス建造物は、そのパワーと地域の人々のまちづくりとの相乗効果によって、熊本にしかない魅力ある文化と、質の高い環境を創りだしている。



くまもとアートポリスコミッショナー/建築家

磯崎 新

7～8年前にくまもとアートポリスの計画が始まった時に、私は前知事から「文化として残るようなまちを作りたい、まちの構成要素は建築なのだから、これを上手く組み立てるために、まちづくりのコーディネートをしてくれ」という提案を受けました。そこで、私が逆に提案したのは、大きい意味で町並みを揃えるとか、個々で地区を開発して新しい空間を造るとか、建物を造るとかいう、それまでのやり方だと限度があるので、今までと全く違ったやり方をしてはどうかということでした。それが今のアートポリスのやり方です。

ある意味で、非常に実務的すぎるというか、プラクティカル（practical 実用）すぎてビジョンがないと批判をされる向きもあります。ただし、これしか取り得なかったというのが私の反論でもあります。大風呂敷を広げた計画を打ってみても、その風呂敷が全然役に立たなくなってしまっている。それなら小さいポイント、ポイント、つまり建物1軒1軒がクオリティをあげていけばいいじゃないかと言いたいのです。建物を具体的に企画する行政の仕事の段取りもあるわけで、とにかくいいものを造ろうと。必要なことは、理論や制度ではなく、感覚で直観で分かっている、いいデザインをする建築家なんだと。論理が飛躍するかもしれませんが、建築家はそういうものだと思っています。そういう建築家を我々がいい仕事の場所に配置する。そして、レベルの高いものが点として出来上がり、その点が増えてくる。その点と点の間に別のものが生まれてくるかもしれない。ただ、何が生まれてくるか、予測はつかないし、しなくてもいい。「計画の中で最も重要なもの。しかも、都市的な配慮をした建築物が1個1個生まれていったら、いつか連続するネットワークが出来るだろう。それが都市である。これ以上大風呂敷を都市で続けることは、議論として結構だろうけど、実現しないだろうというのが、その時に私の考えた結果です。比喩的に言えば、マスタープランが大きな

Z A K I

物語とすれば、1個ずつの小さい計画は小さい物語なのだから、小さい物語を数多く作っていくと一つの大きい物語になるのではなく、小説の構造をもった歴史的レベルのものに組み立てられるのではないか、何十年といったスケールで考えていくことが、一番いい方法であるというのが私の考えたことです。

具体的には、熊本が賛同してくれる建築家と一緒に仕事が出来るわけで、時には伝統的な建物の場合もあるし、現代的な新しいデザインをしている人もいるわけです。またある時は、地域の素材を巧みに取り入れたりと千差万別です。それは、今日の建築界全体が、たった一つの世界のプリンシプル（principle 原理・原則）でメソッドを組み立てることが不可能になっているということです。逆に不可能になったことを一つひとつ証明していったらいいのであって、うんと違った人が、うんと違ったデザインをした方がいいのです。一見してあっと驚くほど違いがあるくらい。バランスが悪いと言われる。では、「何故統一されたものがいいんですか」と尋ねると、「統一したものが美しい」という。しかし、その美意識そのものが、元々古い美意識に違いないとなってくる。

熊本の場合、唯一メリットがあるとするならば、ここには、東京などのメトロポリスに比べて、豊かな緑、水、川、海、平地、山などいろいろな自然の地形が備わっています。一定の高密度にできない状態である都市というよりは、田園的な環境の中に建物を配置するというのが、ほとんどのシチュエーション（situation 状況）です。バックグラウンド（background 背景）としてパラメーター（parameter 変動要因）になるものは、自然の光景そのものであってもいいし、それと対峙する、いくつかの視点をそれぞれの人が別のやり方で解決していけばいい。それが出てきたら、もっと面白い複雑な物語、単純でない、ひとまとめにならない複雑怪奇な物語がいつか出てくるはず。その中で、日本語的に述語になるのは、「熊本の場合は自然であろう」というのが私の考えなのです。

（平成8年11月2日　都市デザインサミット　基調講演より抜粋）

A R A T A　I S O

KUMAMOTO
ARTPOLIS '96
SUMMER HOLIDAY
WATCHING

Tour.

もっと知りたい、もっと見たい―
建物が好きだから。熱い気持ちは、熊本を目指した。

建築を学ぶ学生や、建築業界に携わる関係者に、くまもとアートポリスの建物を見てもらい、理解を深めてもらう「見学ツアー」が、平成8年8月23日から2泊3日の日程で行われた。ツアーには、北海道から鹿児島まで全国各地から集まった約90名が参加。アートポリス作品を設計した建築家の伊東豊雄さん、武田光史さん、青木淳さんもガイド役として同行し、参加者と真剣に語りあうシーンも。第一線で活躍する建築家と、将来建築家を目指す若者たちの熱い3日間の軌跡を追ってみた。

雑誌で見るだけじゃ物足りない 自分の目で確かめたい

空港に、駅に、少しずつ顔が集まる。「奈良から夜行バスに乗ってきました。ずっと座りっぱなし」「熊本は北海道と違って歴史があるイメージです」「実家が八代だから、久し振りの帰省。一緒に参加した先輩を実家に招待したんです」九州をはじめ、関西、関東、北海道から、建築を学ぶ学生や、建築業に携わる顔ぶれが大集合。90名の参加者のうち8割が学生、全体の4割は女性だ。年齢、専攻、業種、出身地……、さまざまなプロフィールを持つ彼らに、ただひとつ共通していることは「熊本の建築を見てみたい」ということだ。

全国から集まった学生のほとんどが、掲示板などに掲げてある見学ツアーの募集を見て自主的に応募。雑誌で紹介されているアートポリス建築物を、自分の目で見てみたい。建物の息吹を自分の五感で感じたい。そんな熱意をもって熊本に集結した。

現在、熊本県内に点在するくまもとアートポリス参加作品は、建物、橋梁、集合住宅など合わせて55点（H8、8月末現在）。さらに、95年に制定された「アートポリス推進賞」を含めると63点にものぼる。今回のツアーでは、宇城エリア1、県南エリア4、県央エリア4、阿蘇エリア12の合計21点の建築物を見学する。

さっそく2台のバスに分かれて、最初の見学地、三角港フェリーターミナルへ向かった。〝海のピラミッド〟として有名な三角港フェリーターミナル。巻き貝のような円錘のフォルムが青い海に映える。

壁面を触る、手をいっぱいに伸ばして体を使って寸法を測る、構造のつなぎ部分を写真に収める、手のひらサイズのスケッチブックにペンを走らせる……。それぞれの五感をフルに使って、建物にアプローチする学生たち。「写真は36枚撮るのに5分もかからない。スケッチはどんなに早くても20分はかかる。建物もいろんな角度がある中で、1カ所だけを描くから、印象が自分の中に刻まれていくんです」と北海道大学の大学院1年生、塚本充さん。彼は夏休みを使って日本中の建築物を見学する旅を続けている。現在、JRの青春18キップ3冊目、宿はほとんど野宿という気ままな一人旅だ。今回のツアーに合わせて来熊。同じ研究室の仲間と、熊本で合流した。「夏休みは設計事務所でバイトしても良かったけど、結局、模型づくりの手伝いで終わってしまう。建築雑誌に紹介されているコメントと、自分が実際に見た時の印象の違いを確認してみたくて」〝おもしろい建築〟って、何だ？　彼の旅立ちのキーワードだった。

北海道大学の大学院1年生、塚本充さん

「朝早くから開館するのを待っていると、守衛さんや管理人の人から、建物の見方や建築当時の裏話を教えてくれることがあるんです」と塚本さん。そんな発見は、現場に出向かないと分からない。建物がどんな人たちに使われているか、どう思われているのか、実際に足を運んだ者だけしか得られない体験だという。

さて、今回のツアーの目玉は、建築家が自ら手掛けた建物を説明してくれる点。雑誌では紹介されにくい、建築家の生の思い入れを、手掛けた建物を前にして聞くことができる。これから建築家の道を進む学生にとっては、またとない勉強のチャンスだ。

日本女子大4年の長峰麻衣子さん

このままでいいのかな？ 最近の建物に〝人〟の姿が見えない

人がいて、そして建物がある。その順番が最近はどうもおかしい。建物が機能性を越えて、モニュメントとして突出しているのではないか。学生たちの間では、現代建築に対して、共通の疑問があるようだ。「例えば、現代建築を見学に行くと、地図で探さなくても分かるぐらいヘンに浮いている。建築家のエゴだと思うこともある」と武蔵工業大2年の楠本俊英さん。

「建物が完成して建築家の手を離れた後、地域の人たちが果たして使いこなせるのだろうか」九州芸工大3年の冬野正仁さんも同じような疑問を持つ一人だ。

バスは八代市へ向かう。「八代市立博物館・未来の森ミュージアム」「八代広域行政事務組合消防本部庁舎」「老人ホーム市立保寿寮」など伊東豊雄さんの手掛けた建築物が数多く点在するエリアだ。

カーブを描いたシルバーの外壁の「八代広域行政事務組合消防本部庁舎」。天井の高いピロティーをつくって2階に消防署の本部機能を上げてしまった。その分トレーニング施設を兼ねた芝の広場が効果的に広がる。

「消防隊員がトレーニングをしているのがおもしろい。いっそ、下のスペースを空けて、ステージのようにしよう。町の人たちに自然に入って来てもらってトレーニングを見てもらおうと思った」消防署の敷地という特別な空間を公園のようにしたかったと話すのはこの建物を設計した伊東豊雄さん。

八代の人たちは、消防署に自由に入ってきたり、それを受け留める気質が根付いていた。実際、住民が見学に来ることで、隊員の意識が変わったともいう。見られている緊張感から、一層業務に励むような相乗効果も出たそうだ。八代市民に向けて、建物自体が消防署の広報にひと役かっているのだ。

地域との交流は〝人〟だけではない。その土地に昔から根付く〝文化〟との交流も念頭に入れておかなければいけない。例えば、「八代市立博物館・未来の森ミュージアム」。この建物は、八代城址や松浜軒（八代城主、松井直之が建てたお茶屋跡）などが点在する文化圏に存在する。「設計の際、最初の課題は、地域の文化や町並みと調和させることだった」と伊東さんは言う。

「八代の町は埋め立て地だから町に抑揚がない。だから物理的なアクセントが必要だった。丘に建つ博物館をイメージしたんです」と伊東さん。その地のカラーを読み

「八代広域行政事務組合消防本部庁舎」の建物を設計した伊東豊雄さんと九州芸工大３年の冬野正仁さん

武蔵工業大2年の楠本俊英さん

KUMAMOTO
ARTPOLIS '96
SUMMER HOLIDAY
WATCHING

Tour.

くまもとアートポリス'96夏休み見学ツアー

大分大学3年の千原仁さんと中島英憲さん

取ることも、設計に必要な要素だ。

「歴史のある町だから、建物に使う色も源氏物語にでてくるような朱色や緑、紫などを共通して使った。それを鉄鋼に配したときが一番きれいなんです」という伊東さんの話に「真似できない、自分には。特にアルミに色を塗るところなんか」と大分大学3年の千原仁さんと中島英憲さん。彼らは、設計の際、大胆な色やデザインをすると批判の対象になるのが目に見えている。だからつい、無難なものを考えがちだという。伊東さんの、設計者と地域との交流の話に「色の選び方も、設計者が好きな色だから、楽しそうな色づかいだからで勝手に決めているわけじゃないことを知りました」と納得した様子。自分の中では到底生まれない発想。その源には、まず地域を考えたものが根底にあることを学んだようだ。

教科書には書いてない授業では体験できないことばかり

カンカンカン、ガン、ガン、ガン。屋根にぽつぽつと、人の姿。工事の人たちが仕事をしながら、こっちを見ている。剥きだしの天井、ビニールを張ったままのガラス板、「ふれあいセンターいずみ」は、工事の真っ最中。平成9年4月の完成に向けて、今まさに急ピッチで進んでいる。

九州山地に抱かれたこの山里は、年々深刻化する過疎と、自然災害によって、観光客の足が遠のいていくという問題を抱えている。「自然に対して立ち向かう、村人の強さを建物で表現しようと思いました。また、林業が盛んな村なので、さまざまな表情をもつ木の建物にしたかった」と設計者の武田光史さん。

工事現場ということもあってか、武田さんの周りには、学生よりも逆に建築業者からの具体的な質問が飛び交っていた。

この建物には、村で初めてのエレベーターがお目見えする。そのエレベーターの前で話し込む2人がいる。岐阜女子大3年の鷲山尚子さんと4年の稲沢しづえさんだ。「学校では実際に造るわけじゃないから、図面でエレベーターをひくときでも〝これくらいかな〟って感じだったんです。でも実際に目の前で見ると、大きくて迫力があってびっくり。教科書には載っていないことだらけです」と鷲山さん。

「出来上がってしまったら、柱の様子や梁がどう走っているのか、全て壁や天井で覆われてしまい分からなくなる。構造を知るには、現場をのぞくのが一番です。それに、自分が設計した建物が形になるのは、現場で働く人のおかげということが分かります。学生さんたちには、よく見ててほしい所です」と武田さん。熱心に見学する学生たちを微笑ましく見つめている。

「ふれあいセンターいずみ」設計者の武田光史さん

岐阜女子大3年の鷲山尚子さん

建物はオブジェではない 安らげる場なんだ

一行は清冽な五ヶ瀬川の上に架かる白い橋『馬見原橋』へ。一見、これがアートポリス？　と思えるような普通の橋。しかし近付いてみると、驚きに変わる。橋の下にもうひとつ橋があるのだ。歩行者用の橋が逆太鼓状に反り返っている。　歩行者用の橋を歩くと、蘇陽産の材木を使った床板から、コンコンと乾いた音。中央には、川面をのぞく穴が2つ。「釣りがしたい」「飛び込んでどのへんまで埋まるか、やってごらん」「バンジージャンプができそう」穴に集まった学生たちは、川面をのぞきながら思い思いの感想を話す。「橋が出来上がった時は、この穴から川にロープを垂らして、ロープ伝いに川面まで降りて、橋まで何秒で戻ってこれるか競争しようという計画もあったんです」と学生たちの反応に、にこやかに答える設計者の青木淳さん。「交通手段に使う橋としてではなく、夕涼みの場所を造ろうと思ったんです。外から見る橋じゃなくて、歩いたり、穴から川をのぞいたり、そんな体験できる橋を」

橋はいわば町のシンボル。だから、もっと目立つものをと希望があった。「柱も丸く、もっとランダムに置こうかと考えましたが、でも土木の設計でここまでできるということを実証したかった。モニュメントとしての建物もいいけど、この町に帰ってきてホッとするもの、形に見えないものを大切にしたかった」と青木さんの説明は続く。橋ができた当初、毎晩のように地元の人たちが下の橋に集まってゴザを敷いては宴会が開かれていた。橋のたもとの焼き鳥屋とロープでつないで、食べ物を運んだり…。ただ通り過ぎるだけではなく、憩いの場になればという青木さんの願いどおりに、この橋は地域のみんなに愛されている。

現代建築は、デザインに走っていて、人の存在を無視している。そんな疑問を抱いてこのツアーに参加した九州芸工大の冬野正仁さんは、地域に根付いている馬見原橋に疑問解決の糸口を見いだした。「建物は、見て楽しむオブジェ的な〝物〟ではなく、安らげる〝場〟なんだ」と。

東陽村の石匠館でのこんな説明が頭をよぎる。九州には石橋が1100ほどあり、そのうち4分の1は熊本にある。長男は石工にはなれない。それほど命をかける仕事だからだ。そんな石工の魂が込められた石橋の役割は、川向いの嫁をもらうためだった。だからずっと使える橋、木の橋ではなくて石橋になったという。つまり橋とは、昔から心の絆をつなぐ役割を持っている。

『馬見原橋』の設計者の青木淳さん

KUMAMOTO
ARTPOLIS '96
SUMMER HOLIDAY
WATCHING

Tour.

くまもとアートポリス'96夏休み見学ツアー

みんな、悩んでいるんだなそう思うと、ホッとした

ツアーの宿泊場所には、温泉どころ熊本らしく、1日目は日奈久温泉、2日目は杖立温泉。両日とも夜は先生たちを囲んでの交流会が開かれ、自己紹介の後は、それぞれ建築家に建物についての質疑応答が行われた。

特に2日目は、夜が更けるまで話し込むシーンも。青木さんを中心に車座になり、課題や就職のことなど、学生ならではの質問が飛び交った。

担当の教授が課題を受け入れてくれないー。武蔵工業大の楠本さんは、自分の悩みを青木さんにぶつけてきた。「何度、提出しても受け付けてくれない。僕の課題と分かると、教授は見向きもしてくれないんです」課題の出来よりも、僕自身が気に入らないのかもしれない…。そこまで考え、悩み続けてきた。

真剣な楠本さんの口調に青木さんも真っ正面から受けとめる。「先生によって、建築の評価の仕方は違う。でも課題の案を通して、神聖な空間にどんな物を具体的に表現しているかが問われることは同じだ。それで分かってもらえないなら、その課題は失敗ではないでしょうか」「建物のコンセプトは、20%は何を言いたいか分かるけど、何を言いたいかわからないものもある。つまんないと分からないは別物。礼儀として、相手に自分の意図が伝わっているか、ちゃんと説明できているかが基本。それからおもしろい、おもしろくないに分かれるんです」と答えは手厳しい。本音の質問には、本音で返す。しかし、悩める学生たちを見る"先輩"の眼差しは温かい。学生たちにとって、やはり気になるのは就職のこと。中には、採用基準や、どんな課題を持参すればいいかなど、具体的な内容を質問をする学生も。「学生生活の中で、今、必要なことは?」「しなければいけないことは?」‥‥。

話の輪の中で、熱心に聞き入る女子学生がいた。大阪芸術大学の3年生山岡艶さん。グループで参加する学生が多い中、設計事務所でインテリアの仕事をする母親の恭子さんと親子で参加している。山岡さんもまた悩みを抱える一人だ。「母の影響でインテリアの勉強をしているけど、本当は陶芸に興味があった。陶芸は将来が不安定なので、どうしようかなって悩んでたんです」今回、本当に自分は建物が好きなのかどうかを確認するためにツアーに参加した。このツアーで将来に対して、自分なりの答えを見付けたかったのだ。そんな山岡さんの心に響いたのは、ある参加者の一言。「自分の得意分野が、やがて自分自身を助けてくれる日が来る。そのためにもフィールドは広いほうがいい」なにげない言葉が、長い間心の中にわだかまっていた気持ちを解放した。「建築家の先生たちや他の学生さんたちと話をして、みんな苦労したり悩んだりしているんだなと思って安心しました。そうか、好きなことをしていいんだって」と山岡さん。「陶芸やガラス工芸、大阪に帰ってどれからやろうかなって、今度はうれしい悩みに代わりそうです」

先輩の言葉で、あるいは同じ悩みを持つ学生たちの言葉で、一人ひとりの意識が確実に変わり始めてきた。

大阪芸術大学の3年生山岡艶さん

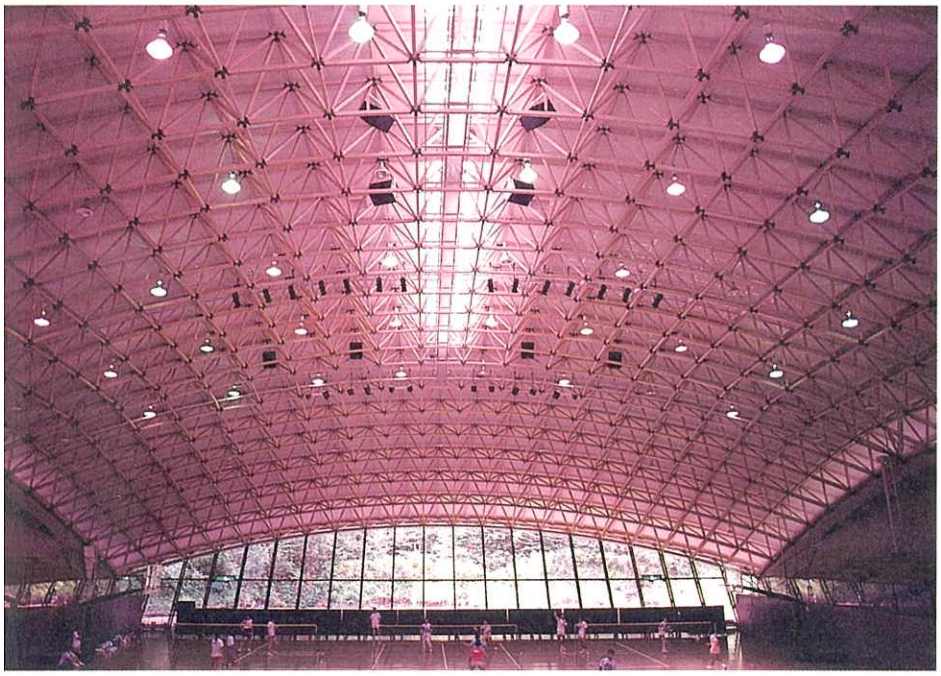
自分の問題点がようやく見えてきた

課題を受け入れてくれないと悩んでいた武蔵工業大の楠本さんにも変化が表れた。交流会が終わった後、楠本さんは同室になった建築士と、設計の進め方、アイデア発想の方法などについて話しあっていた。

「以前、クラスの同級生の課題を手伝った時のことを話したんです。測量をして、地元の人たちの声を聞いて、何回も何回も現地に足を運んで、それからようやく図面を引き始めた。その結果課題は学内で1位に輝いた。そんな話を」

「そしたら建築士の人にそんなの当たり前だって教えてもらって。いままでの自分の課題の出し方は一人よがりだって指摘されて」と楠本さん。それでようやく教授に課題を受け付けてもらえない理由、自分の問題点が見えてきたという。

悩みは完全に吹っ切れたわけではない。まだ出口が見えただけだ。また何度か挫折を繰り返すかもしれない。でも、ツアーが終わるころ楠本さんの笑顔は明るかった。このツアーで学んだことは、将来の糧になることは間違いないだろう。



熊本から全国へ、そして世界へ アートポリスの波は広がっていく

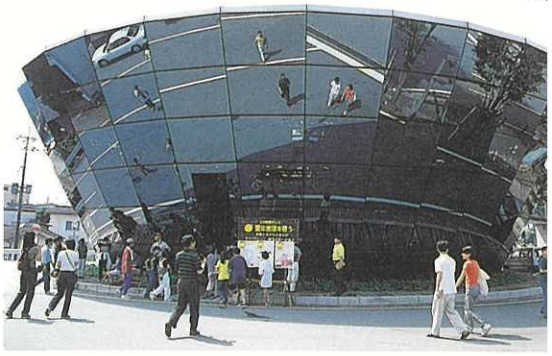
ツアーの最終日は、小国杉を使った木造建築で一躍有名になった小国エリアへ。小国の交通センター「ゆうステーション」では、建物を見ながら、お土産を求める姿も見られた。

奈良女子大4年の稲永由里さんは「建物は与えられた条件や、要望をクリアーしていくだけじゃなくて、設計者に発想の転換や提案が大切なのが分かった。提案していかないと、人の意識は変わらない」研究室12名中10人はこのツアーに応募していたが、結局、同じ研究室で参加できたのは稲永さんたち3人。「奈良に帰ったら、さっそくみんなに写真を見せます」

KUMAMOTO
ARTPOLIS '96
SUMMER HOLIDAY
WATCHING

Tour.

くまもとアートポリス'96夏休み見学ツアー



現代建築に疑問を抱いてこのツアーに参加した九州芸工大の冬野正仁さんは「八代の博物館は、地域との景観とのバランスを考えて設計され、馬見原橋は、オブジェ的な"物"ではなく、"場"を造ったと、それぞれの建築家がおっしゃってた。その言葉に納得しました」都市計画を専攻している彼にとって、人と建物とのつながりは一番気になるところだった。「建築家は芸術家であって、かつ棟梁であるべきだと思います」と将来の自分の姿を語る。クラスメートの男女8名で参加した冬野さんたち。夏休み期間中に、再び熊本を訪れようと計画中だ。今度は、もちろん自分たちの足を使って。

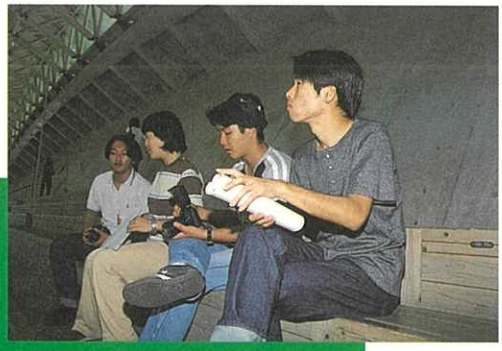
「アートポリスは、最初"目立つ物をつくっちゃえ"ということで建築業界のカンフル剤だった。最近ではそれが変わって、この建物を造ったことで地域がどうなるかという地元のカンフル剤になってます」と青木さん。アートポリスの建築が、その地域において積極的に提案して、それを継続していく。町に馴染ませるために、この場にどういったものを造ればいいか、それがこれからの建築では大切なことだ。「映画の中の町は自分でつくるけど、建築はあらかじめ町があって、その中に1つコマを入れることで変わる。一石を投じることで、物や場に変化量を与えて、町がどう変るかが面白い」という。

例えば、小国の西里小学校の木のドームで過ごした児童たち。彼らの中には、他の小学校を見て"どうしてこんな当たり前の形なんだろうか"と感じるかもしれない。知らず知らずのうちにアートポリスの感覚を身に着けているとしたら、彼らは立派なアートポリスの担い手になるだろう。

例えば、八代の老人ホーム保寿寮で暮らすおばあちゃんが教えてくれた自分の大好きな景色が見られる場所。建築家はそれを意図してつくったのか、それとも偶然そうなったのか分からない。いずれにせよ、この建物で暮らさなければ、発見できなかったことだ。住む人の言葉の裏には、建物と人との関わり合い、つまり、これからのアートポリスを支えていくキーワードが隠されている。

「熊本のアートポリスの感想を、それぞれ地元で話しますよね。それを聞いて、他の人がまた熊本へやって来る。繰り返すうちに次第に大きな波紋になっていく。その出発点が熊本になるんです」と大阪芸術大の山岡さん。将来のことで悩んでいた彼女にも、熊本が新たな出発点になったようだ。「建物を通して、全国の人、世界の人が動きだす。それがアートポリスの効果だと思う」と北海道大学大学院生の塚本さんも同意見。塚本さんは、このツアーが終わっても、しばらく熊本の建物を見て回る予定。再び一人旅へと出発するそうだ。

2泊3日のアートポリス見学ツアーで、彼等はそれぞれの思いを抱いて帰路へと向かう。熊本で見て触れた印象は、やがて全国へ。そして、世界へと発信されていくのだろう。これからの建築を担うアートポリス予備軍が、熊本を起点に誕生したのだ。



KUMAMOTO ARTPOLIS '96 WATCHING TOUR

「くまもとアートポリス'96」では、8月の見学ツアーに続き、11月にも見学ツアーを実施。建築に関係の薄い主婦やお年寄りを含む多くの人々が、八代、五家荘、阿蘇、清和、三角・松島、天草の6つのコースに分かれてアートポリス参加プロジェクトを見学した。

11/1 八代

■伊東豊雄氏等設計の建造物の見学
■平成8年11月1日(金) 日帰り

熊本空港 ⇒ 熊本交通センター ⇒ 熊本駅 ⇒ 八代消防本部 ⇒ 八代市内(昼食) ⇒ 八代市立博物館 ⇒ 保寿寮 ⇒ 東陽村石匠館 ⇒ ふれあいセンターいずみ ⇒ 熊本交通センター ⇒ 熊本空港

11/1 阿蘇

■トム・ヘネガン氏等設計の建造物の見学
■平成8年11月1日(金) 日帰り

熊本駅 ⇒ 熊本交通センター ⇒ 熊本空港 ⇒ 特産ピラミット(昼食) ⇒ 坂本善三美術館 ⇒ パラソルセンター ⇒ 小国ドーム ⇒ 木魂館 ⇒ 草地畜産研究所 ⇒ 熊本交通センター ⇒ 熊本空港

11/2 五家荘

■五家荘コース
■平成8年11月2日(土) 日帰り

交通センター ⇒ 東陽村石匠館 ⇒ ふれあいセンターいずみ ⇒ せんだん轟の滝 ⇒ 樅の木(昼食) ⇒ 樅の木吊り橋 ⇒ 平家の里 平家伝説館 ⇒ 二本杉 ⇒ 熊本交通センター

11/5 三角・松島

■葉祥栄氏等設計の建造物の見学
■平成8年11月5日(火) 日帰り

熊本交通センター ⇒ 石打ダム管理所・資料館 ⇒ 三角フェリーターミナル ⇒ 天草2号橋(昼食) ⇒ 天草ビジターセンター・天草展望休憩所 ⇒ 松島町終末処理場 ⇒ 三角西港 ⇒ 熊本駅 ⇒ 熊本交通センター ⇒ 熊本空港

11/9 清和・石橋群

■清和・石橋群コース
■平成8年11月9日(土) 日帰り

熊本交通センター ⇒ 清和文楽館(文楽観賞) ⇒ 清和物産館(昼食・買い物) ⇒ 馬見原橋 ⇒ 通潤橋 ⇒ 熊本交通センター

11/16~17 天草

■天草コース
■平成8年11月16日(土)・17日(日) 1泊2日

熊本交通センター ⇒ 三角港散策(三角フェリーターミナル、三角築港記念館) ⇒ 天草ビジターセンター・天草展望休憩所⇒ 本渡市内ホテル(泊) ⇒ 轟の滝公園 ⇒ 高浜焼 ⇒ 大江天主堂 ⇒ 牛深ハイヤ大橋 ⇒ 昼食 ⇒ 熊本交通センター

くまもとアートポリス参加プロジェクト

1988

KUMAMOTO ARTPOLIS ENTRY PROJECT

1996

K·A·P

国の内外の建築家、デザイナーの英知を結集して建物、橋などを設計し、デザインとアイデアを競い合う「くまもとアートポリス」。

事業開始後8年あまりを経た今、参加プロジェクトは56件（平成9年3月末現在）を数え、

小さなものは公衆トイレから、1000世帯が暮らす公営住宅まで、その種類はバラエティに富んでいる。

また「アートポリス推進賞」受賞建造物は11件に上っている。それぞれの地域に根付いたアートポリスのプロジェクトは、地域にパワーを与え、人々を強く魅了し、

県内各地でダイナミックなまちづくり推進の核としての役割をいかんなく発揮している。

第2期

くまもとアートポリス参加プロジェクト

1993

KUMAMOTO ARTPOLIS '96 ENTRY PROJECT

1996

K·A·P

天草ビジターセンター・天草展望休憩所（松島町）

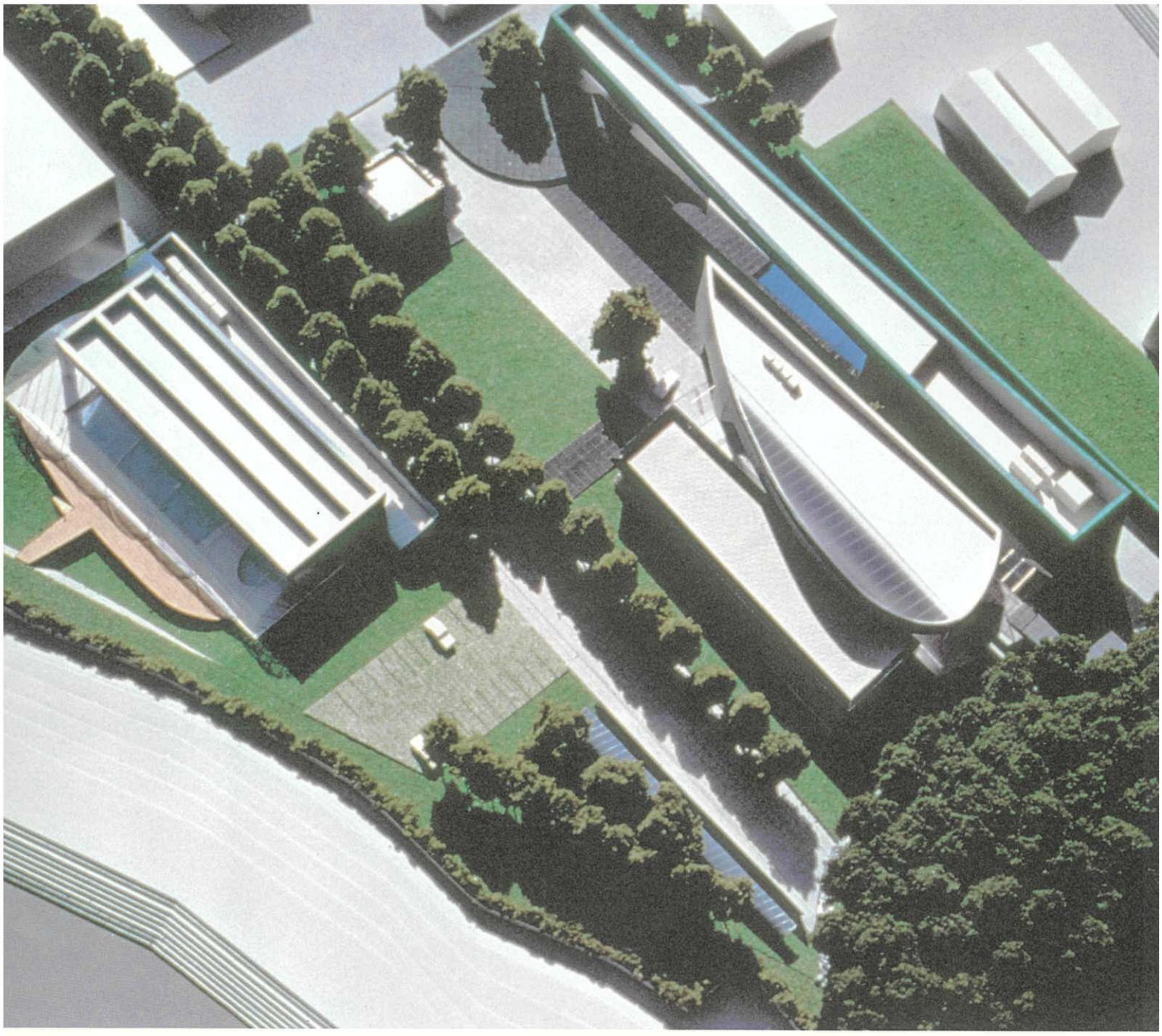
竣工：94年7月
設計：古谷誠章+中川建築設計事務所

天草五橋の2号橋のたもとに建つ天草ビジターセンターは、島々の稜線に合わせて微妙にうねる屋根のラインと海側をすべてガラス張りにした壁面が印象的な建物。床や壁は周辺から採られた砂や石で造られており、天草の美しい自然と建物が一体となるようにデザインされている。天草の自然や風土を展示する棟とティーラウンジ・物産ショップの2つの棟があり、天草観光の足がかりとして、多くの人が訪れる。

うしぶか海彩館（牛深市）

竣工：97年3月
設計：内藤　廣

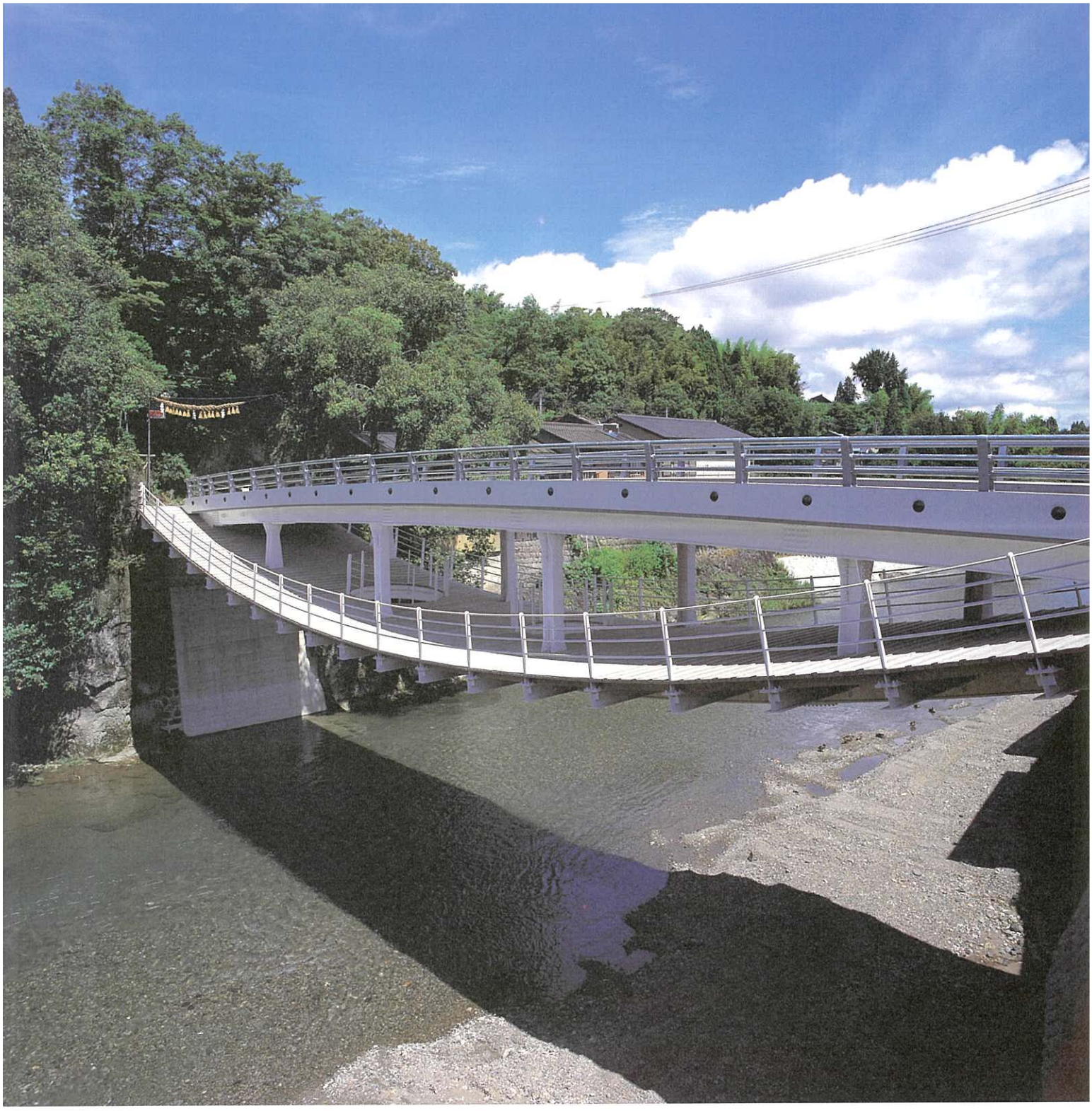
牛深ハイヤ大橋の橋脚のたもとに建築されているうしぶか海彩館は、「いろいろな要素が混ざりあう市場のような空間」が設計のコンセプト。巨大な水槽を中心として、昔の漁船の展示や牛深ハイヤ道場、レストラン、観光案内所などが並ぶ複合施設として工事が進められている。オープンは97年4月。牛深ハイヤ大橋とあわせて、牛深の新しい観光の目玉になればと、地元からの熱い期待が寄せられている。



不知火町文化プラザ（不知火町）

設計中（99年3月竣工予定）
設計：北川原　温+伊藤建築事務所

1階は図書館と美術館、2階は交流館にあてられる。建物への進入路として並木道「緑のプロムナード」が提案されており、また建物の後方には「緑の杜」が用意されている。これは平坦な不知火町にあって、この施設が町のシンボルになることを願って考えられたもの。美術館にはマナブ間部や野田哲也など地元ゆかりの作家の作品収蔵が予定されており、町の文化の拠点として、憩いの場として完成が待ち望まれている。



馬見原橋（蘇陽町）

竣工：95年6月
設計：青木淳+中央技術コンサルタンツ

五ヶ瀬川に架かる馬見原橋は、車道用の橋の下にもうひとつ、歩行者用の反り返った橋が架かっている。下の橋の中央には川を見おろせる穴が2ヶ所。車道用の橋がつくる日陰と、川風が涼をもたらすことで、地元の人の憩いの場になっている。夏場は住民たちがゴザを敷いて宴会をしたり昼寝や読書をする姿も。単なる橋の機能を越えて、人が集まる場として親しまれている。

天草工業高校実習棟（本渡市）

竣工：98年（予定）
設計：室伏次郎+ＳＤＡ建築設計事務所

天草上島と下島を結ぶ天草瀬戸大橋の足下、本渡市中心部の玄関口という重要な場所に位置しているため橋、海、港や周辺の建物との調和が心掛けられている。大きな面をなす海側のファサード（建物の立面）は大型客船のキャビンのようにも見え、風の流れを考慮した大きなガラス面は、自然や景観と一体化した豊かな室内環境をつくりだす。

熊本北警察署坪井交番（熊本市）

竣工：95年3月
設計：マニュエル・タルディッツ+加茂紀和子

2階の壁一面に描かれた「KOBAN」の文字がユニークな坪井交番。建物は道路との境界線からセットバックしており、空いたスペースには金色の球状のオブジェなどを配置。小さなパブリックスペースとして市民に親しまれている。また、2階部分は、道路と並行している1階部分にクロスする形で乗せられた金色の箱。車やバスからよく目につき、坪井の新しいランドマーク（目印）となっている。

ふれあいセンターいずみ（泉村）

竣工：97年3月
設計：武田光史+ロゴス設計同人

泉村に初めてのアートポリス作品が誕生する。新しい建物に何を展示するか、特産品として何を売るのか、観光客をどうやってもてなすのかなど、この建物の利用法を考えることをきっかけとして、地元住民の間に村の良さを見直す動きが起こっている。都会と山里の情報交換の拠点として、村活性化の起爆剤として、ふれあいセンターいずみに寄せられる期待は大きい。

有明フェリー長洲港ターミナル（長洲町）

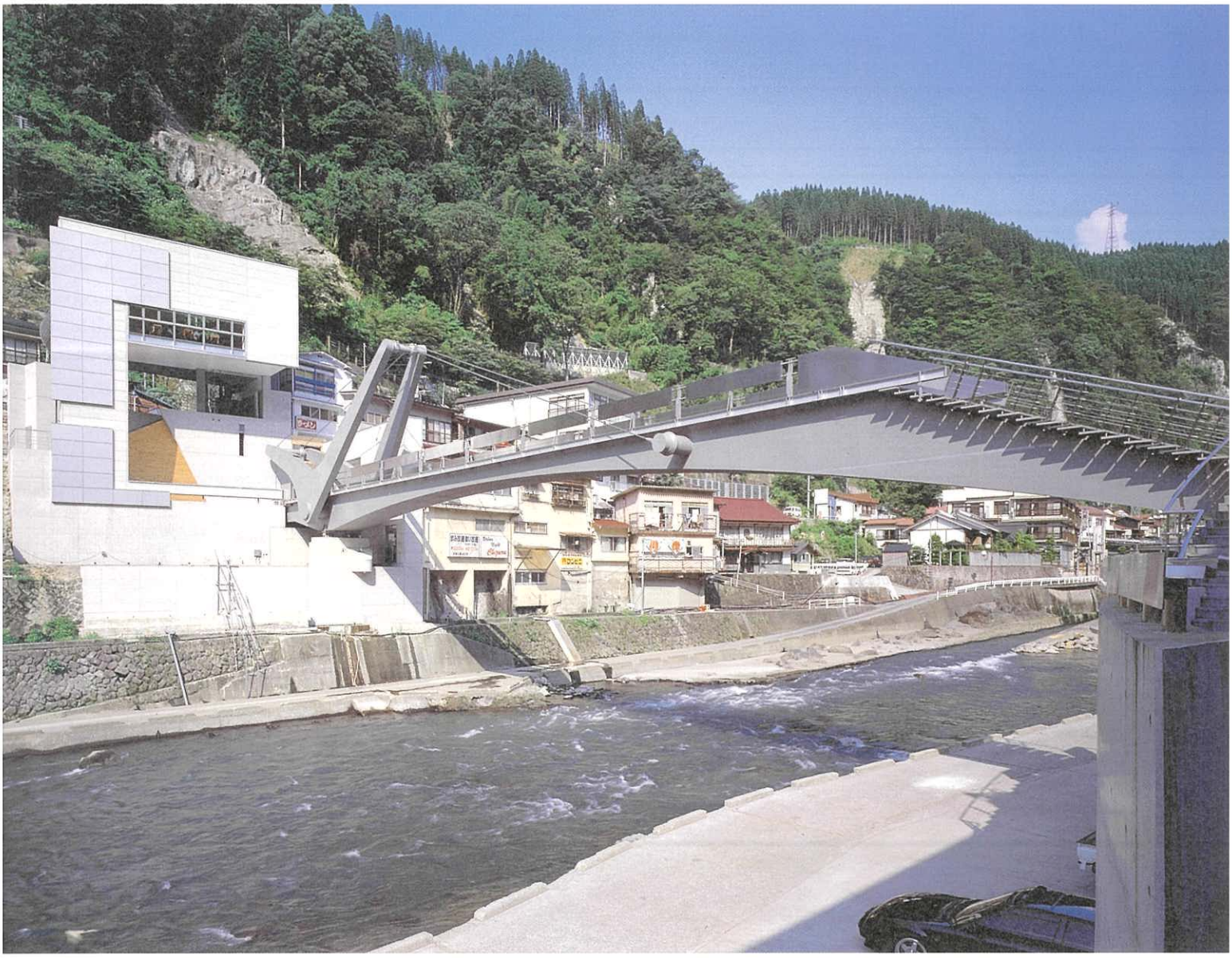
竣工：96年3月
設計：石田敏明

有明周遊観光ルートの中でも人気が高く、年間200万人が利用する有明フェリー。そのターミナルは、接岸する船に並行して配置されている。これは、車での利用客の前方視界を妨げずに、乗船までの手順をできるだけ分かりやすくしようというもの。待合室は海に向かって大きく解放されている吹き抜け空間になっており、利用客がひとときのゆったりとした時間を楽しめる。

荒尾警察署長洲交番（長洲町）

竣工：96年3月
設計：塚本政利+設計機構ワークス

有明海に面した長洲町。海を照らす灯台をイメージしてデザインされたこの交番は、灯台のごとく日夜、町の安全を見守っている。併設されているコミュニティ室は地域の情報交換の場として開放されており、町民と警察との連絡協議会が定期的に開かれている。また、地元小学生の壁新聞が取材に訪れたり、町民から「おもしろい交番ができたね」と声を掛けられるなど、建物を媒介とした町民とのコミュニケーションも深まっている。



杖立橋+Pホール（小国町）

竣工：96年3月
設計：新井清一+シダ橋梁設計センター

温泉街の中を流れる杖立川にかかる橋とたもとの多目的ホールが一体となって周囲と違和感のない、それでいて存在感のある風景をつくりだしている。Pホールは、建物の形がP字型になっており、元気なひとたち（POWERFUL PEOPLE)が集まる場という意味。地元の女性グループが運営を町から委託され、ギャラリーやコンサートなどが年中企画されている。観光客がちょっと立ち寄り観光情報を得たり、地元の人と話し込んだりする情報交換の場でもある。

県立芦北青少年の家（芦北町）

設計中（98年7月竣工予定）
設計：エリア・ゼンゲリス+エレーニ・ジガンテス+鈴木了二+島村建築設計事務所

芦北海岸県立公園の不知火海に突き出た岬（井手の鼻）の突端に建設が予定されている。集団学習活動、世代間交流、広域の交流、国際的な交流を目的とした研修施設で、県内では4つ目の県立青少年の家。一度に高校生300人が宿泊出来る広さを持つ。ヨットマリーナ、キャンプ場など野外活動のための関連施設も併せて整備する。

草千里公衆トイレ（阿蘇町）

設計中
設計：塚本由晴+齋藤百樹建築設計事務所

熊本の観光のメッカともいえる阿蘇中岳の火口にほど近く、草千里と阿蘇火山博物館に隣接した場所に建設が予定されている。斜面をめくり上げた中にトイレを埋め込み、周囲の自然景観を損なわず、なおかつ利用者に分かりやすいように設計されている。機能性のみに終始していた公衆トイレに、アート感覚がつけ加えられ、新しい観光ポイントとしての期待も大きい。

宇土マリーナクラブハウス（宇土市）

設計中
設計：吉松秀樹

国道57号沿い、マリンスポーツのメッカ、御與来海岸近くに建設が予定されている。管理室、会議室、休憩室、宿泊室、食堂などを備え、前庭ではイベントも可能。マリンスポーツサークルの情報交換、交流の場として、また地元の人が気軽に立ち寄れる空間として計画されている。

阿蘇農村公園アートプロジェクト（阿蘇町）

設計中
設計：堀　正人

平成10年オープン予定の阿蘇農村公園の一角をアートプロジェクトとして整備するもので、コミッショナーによる公開コンペティションでプロジェクトの内容を決定した。農村と都市との交流による活性化を目指す阿蘇町の新しい顔となることが期待されている。

漁業取締連絡事務所（三角町）

設計中
設計：小材健治

漁業違反に対する取締り拠点として三角町三角浦に建設を予定、コミッショナーによる公開コンペで設計者を選出した。周囲の景観や地区の歴史的背景に配慮した設計になっており、地域づくりの先導的な役割も期待されている。

第1期

くまもとアートポリス参加プロジェクト

1988

KUMAMOTO ARTPOLIS '96 ENTRY PROJECT

1992

K·A·P

●熊本北警察署

竣工：90年10月
設計：篠原一男+太宏設計事務所

●県立美術館分館

竣工：92年10月
設計：エリアス・トーレス
+ホセ・A・M・ラペーニャ
+大和設計

▲白川橋景観整備
竣工：92年11月　設計：藤江和子

▼熊本市花畑パークトイレ
竣工：89年10月　設計：大塚豊一

▲熊本市上江津湖畔トイレ
竣工：89年5月　設計：日田　兆

▼県営新渡鹿団地
竣工：93年3月　設計：小宮山昭

▲県営保田窪第一団地
竣工：91年12月　設計：山本理顕

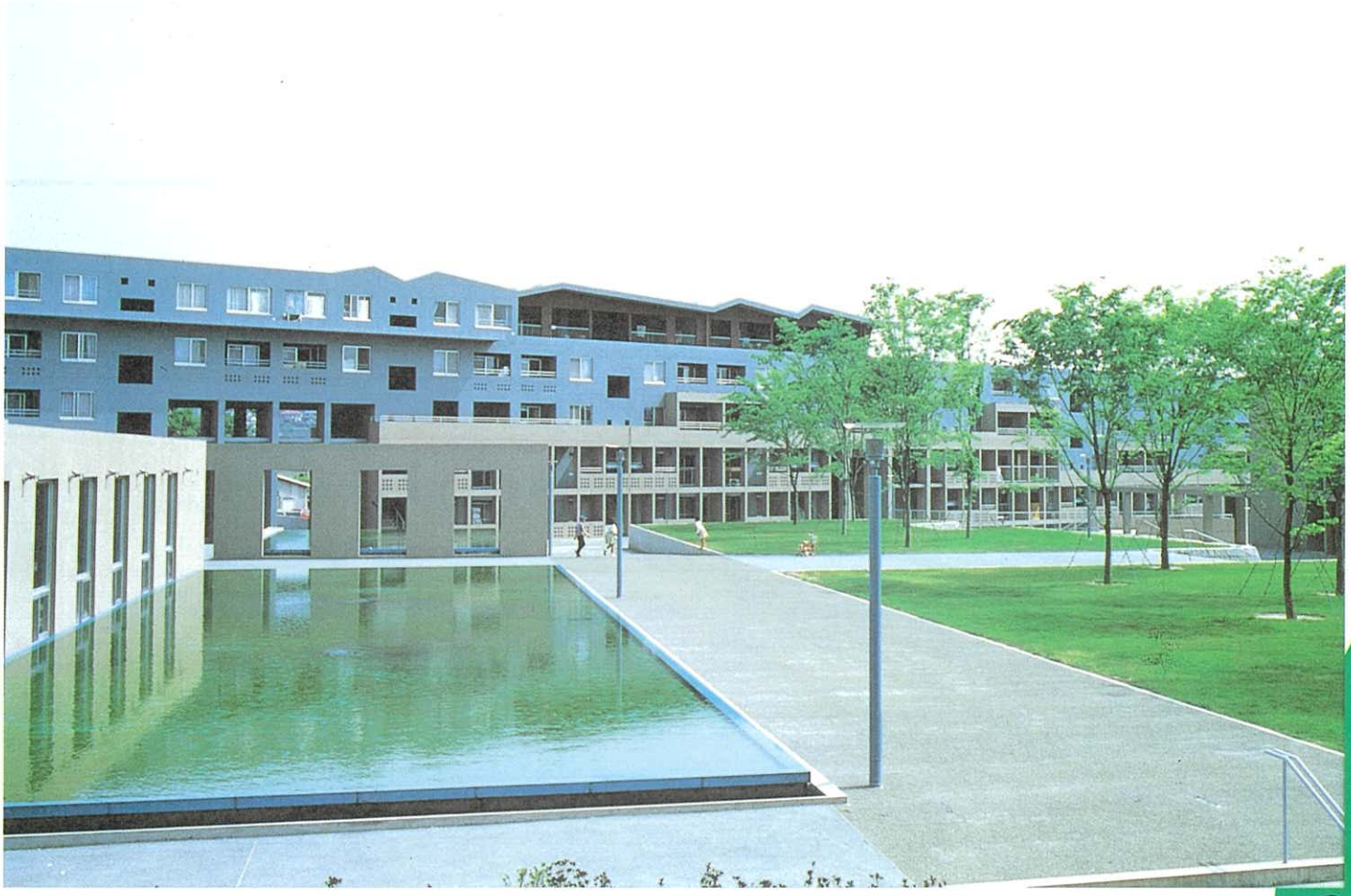
◀県営帯山A団地
竣工：92年3月　設計：新納至門

▲再春館レディースレジデンス
竣工：91年8月　設計：妹島和世

▶県営竜蛇平団地
竣工：94年2月　設計：元倉眞琴

▲熊本市営託麻団地
竣工：94年4月　設計：坂本一成+長谷川逸子+松永安光

▼熊本市営新地団地A
竣工：91年7月　設計：早川邦彦



▲熊本市営新地団地B
竣工：92年3月　設計：緒方理一郎

▶熊本市営新地団地C
竣工：93年11月　設計：富永　譲

▶ 熊本市営新地団地D

竣工：95年6月　設計：西岡　弘

▼熊本市営新地団地E

竣工：96年6月　設計：上田憲二郎

◀ 玉名天望館
竣工：92年9月　設計：髙崎正治

▼県立装飾古墳館
竣工：92年3月　設計：安藤忠雄

▲TOTO　AQUAPIT　ASO（阿蘇山上公共トイレ）
竣工：92年3月　設計：木島安史

▼草地畜産研究所畜舎
竣工：92年9月
設計：トム・ヘネガン+インガ・ダグフィンスドッター
+桜樹会・古川建築事務所

▲花の温泉館

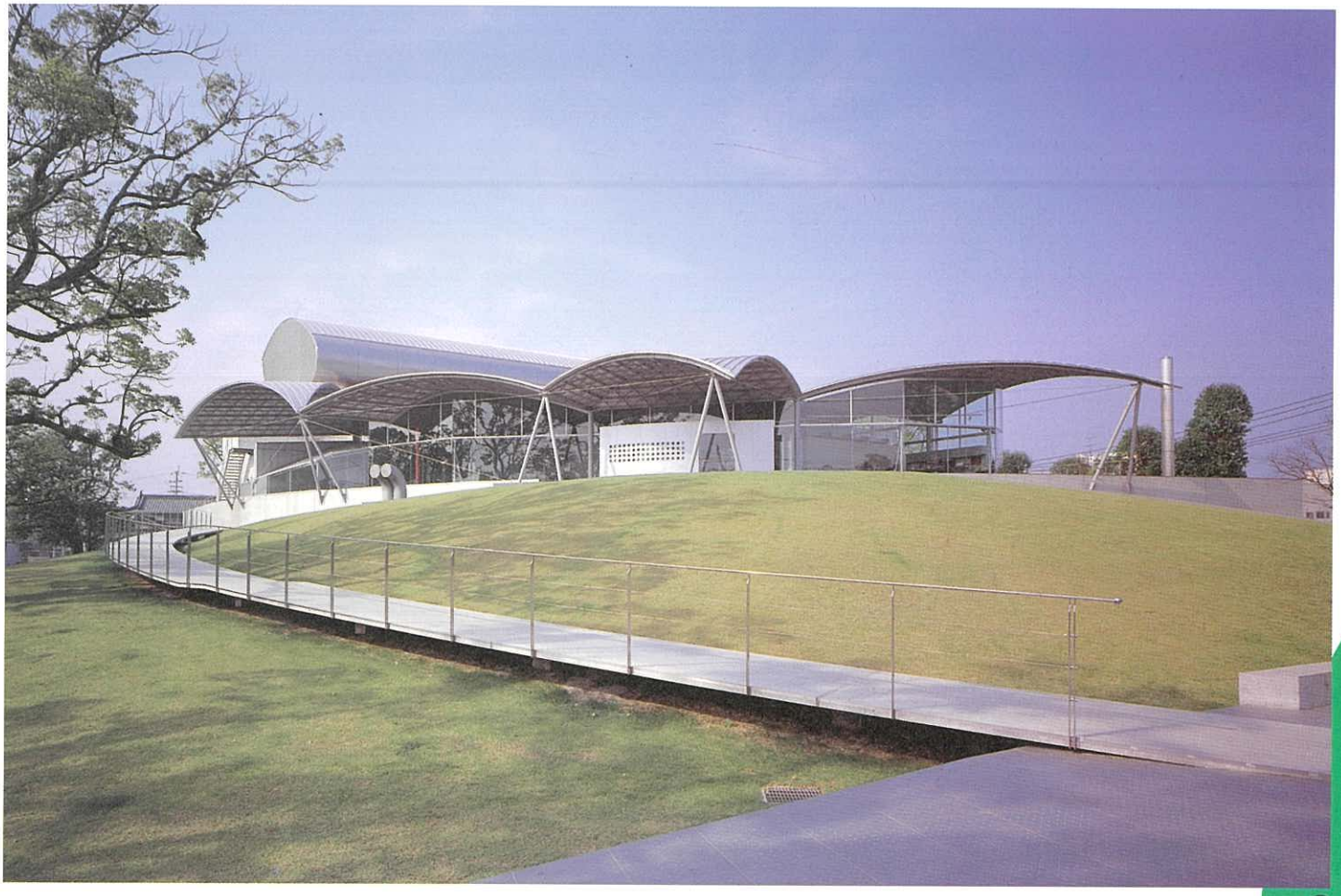
竣工：93年12月　設計：ワークショップ

▼鮎の瀬大橋

工事中　設計：大野美代子+中央技術コンサルタンツ

▲清和文楽館
竣工：92年3月　設計：石井和紘

▼八代市立博物館　未来の森ミュージアム
竣工：91年10月
設計：伊東豊雄

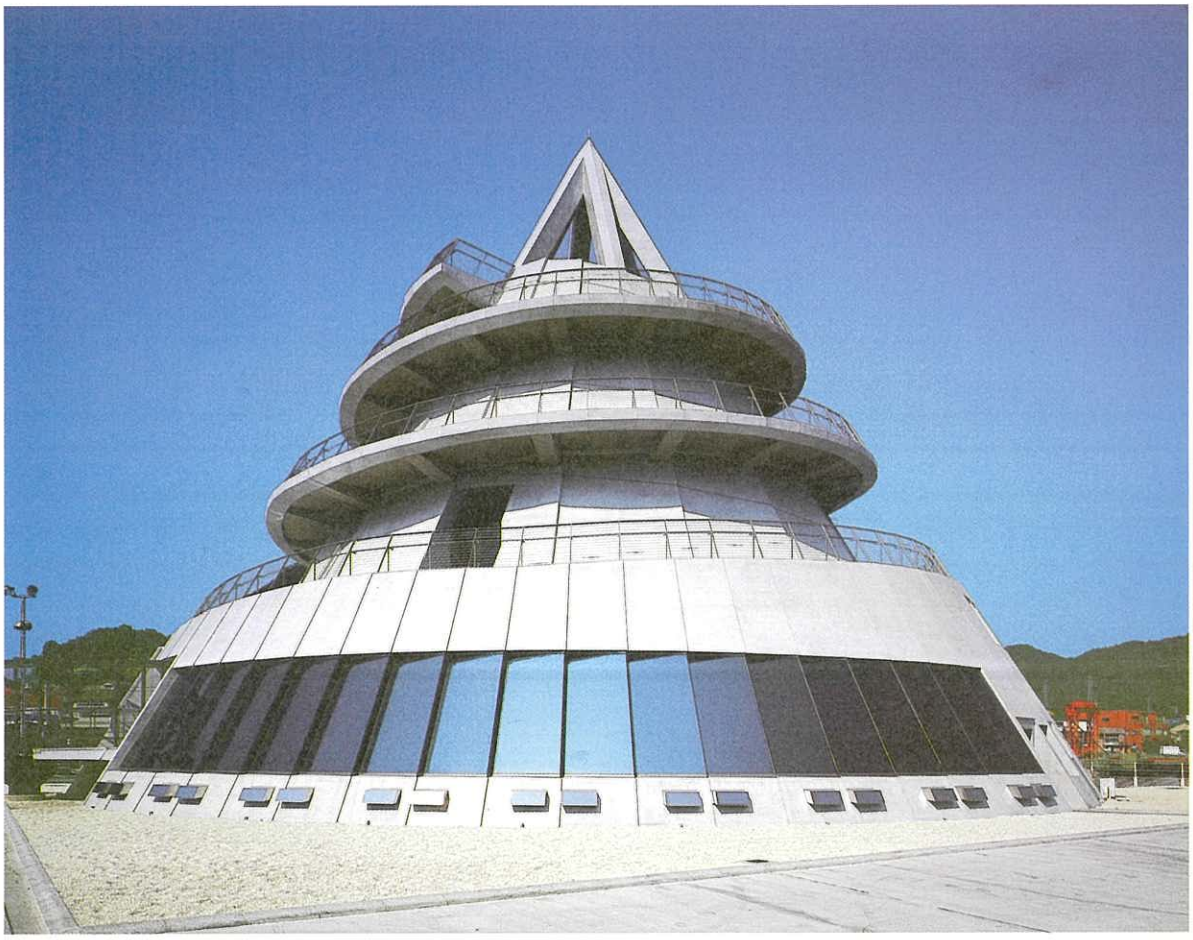


▲石打ダム管理所

竣工：91年2月　設計：青木 茂

▼石打ダム資料館

竣工：93年4月　設計：入江経一



▲三角港フェリーターミナル
竣工：90年3月　設計：葉　祥栄

▼松島町合津終末処理場管理棟
竣工：93年3月
設計：齋藤　宏

◀教会の見える
チャペルの鐘展望公園
竣工：93年3月
設計：梅田正徳+スペースデザイン

▼牛深ハイヤ大橋
工事中
設計：レンゾ・ピアノ＋
ピーター・ライス＋
岡部憲明+マエダ

▲湯の香橋
竣工：91年5月　設計：岸　和郎

▼つなぎ物産ギャラリー・グリーンゲイト
竣工：92年6月
設計：北山孝二郎

◀球磨工業高校伝統建築実習棟
竣工：91年3月
設計：象設計集団

▼加久藤トンネル換気所
竣工：89年8月
設計：小山明＋
パシフィックコンサルタンツ

▲湯前まんが美術館・公民館
竣工：92年11月　設計：桂　英昭＋ＡＩＲ

既存

1992

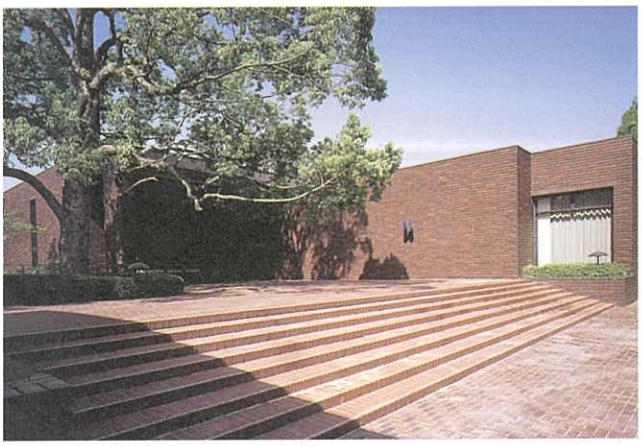
くまもとアートポリス'92　選定既存建造物

K·A·P

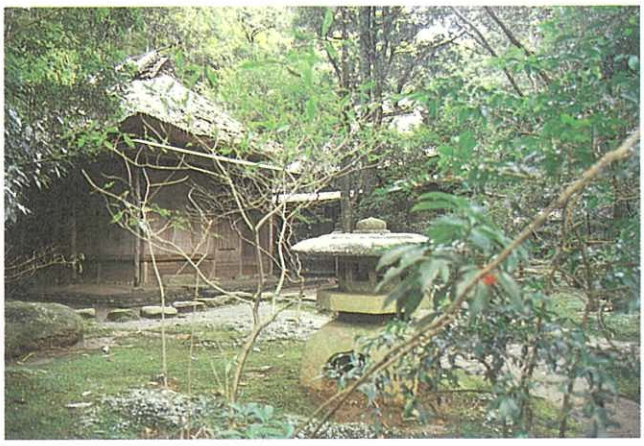
県内には、アートポリス参加プロジェクト以外にも、
長い歴史の中で県民に愛されている建物、新しいデザインや工法が取り入れられた建物、美しいまちなみや景観が数多く点在している。
1992年、「くまもとアートポリス'92」において、これらの建造物の中から、熊本県を代表するような建物を選定。
アートポリス参加プロジェクトとともに、熊本の建築文化として内外に広く紹介している。

●熊本大学工学部研究資料館（旧熊本高等工業学校機械実験工場）

●細川家霊廟・泰勝寺



●県立美術館



●泰勝寺茶室（仰松軒）

●熊本城（石垣、宇土櫓等）

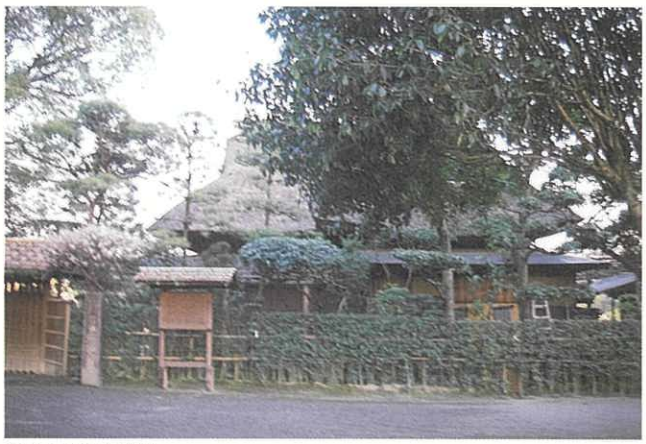
●熊本大学資料館（旧第五高等学校本館）

●数寄屋丸

●熊本大学資料館別館（旧第五高等学校化学教室）

●水前寺成趣園

●第一勧業銀行熊本支店


●古今伝授の間

●細川家霊廟・妙解寺

●熊本洋学校教師館ジェーンズ邸（日赤記念館）

●県営帯山第二団地

●熊本市水道局

●県立東稜高校

●岩本橋

●木魂館

●緒方家住宅

●小国町交通センター

●境家住宅

●小国町民体育館

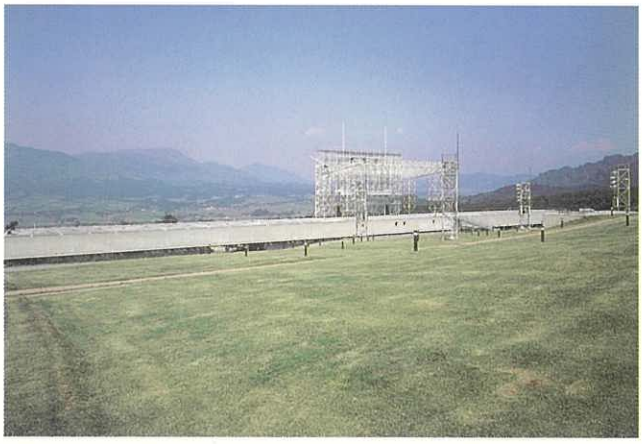
●一の宮阿蘇神社

●八千代座

●通潤橋

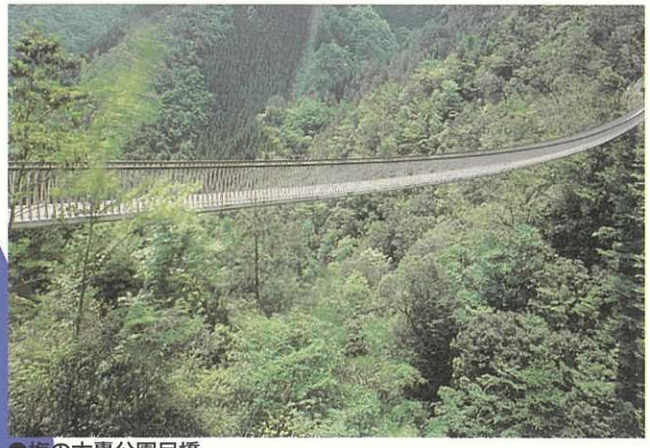
●鉄砲小路

●霊台橋

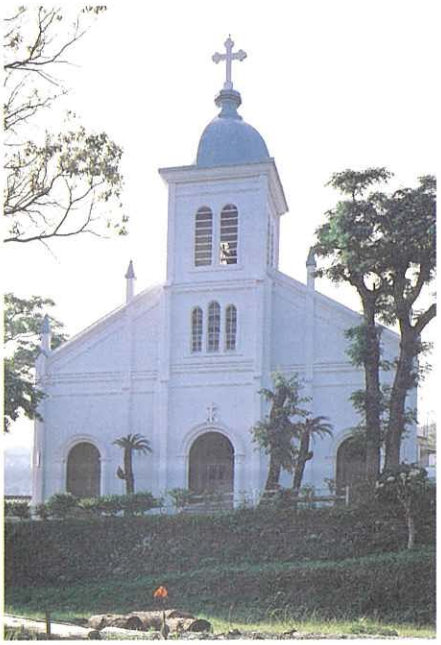

●アスペクタ

●三角西港

●熊本テクノポリスセンター


●梅の木轟公園吊橋

●西原村営河原団地



●大江教会堂

●熊本県水産研究センター

●東陽村営淵の本団地

●崎津教会堂

●松浜軒

●祇園橋

●青井阿蘇神社（楼門、本殿、幣殿、拝殿）

●牛深市営鬼塚団地

●太田家住宅

●球泉洞森林館

●明導寺阿弥陀堂（城泉寺）

●青蓮寺阿弥陀堂

●桑原家住宅

●重盤岩眼鏡橋

推進

KUMAMOTO ARTPOLIS

くまもとアートポリス推進賞

K·A·P

くまもとアートポリスは、一連の建設事業を行うことにより、
都市デザインに対する県民の関心を高めるとともに建築文化の向上を図り、また、地域のアイデンティティの向上に寄与してきた。
1988年に始まって以来、アートポリス参加作品は56件（平成9年3月現在）に達しているが、
今、一つの可視的な波及効果として、県内の建築がここ数年確実に変化を遂げていることが挙げられる。
そこでアートポリスの趣旨に沿った建造物を対象に、1995年から「アートポリス推進賞」が設けられた。
入賞条件としては、建築作品として優れているばかりでなく、
その建築が地域の文化、活性化に役立っているということを重要項目とした。
同賞は、アートポリスを幅広く県民に理解してもらうため、あるいは、事業の達成度を測るものとして、
今後、アートポリス事業の一翼を担うものと期待されている。

1995年　第1回くまもとアートポリス推進賞

株式会社野田市兵衛商店流通団地営業所（熊本市）

■事業主：株式会社野田市兵衛商店
■竣工：平成6年2月
■設計者：株式会社ワークショップ

極度に軽量化された構造体、曲面天井、西日を避けるためのベランダの活用、新しい空調システムなどの工夫を積み重ねて、新しいタイプのオフィス空間を創造した。近代建築のオーソドックスな手法に沿ったものだが、理解され易く、多くの人の共感を得ている。

1995年　第1回くまもとアートポリス推進賞

小国町立西里小学校（小国町）

■事業主：小国町
■竣工：平成3年9月
■設計者：木島安史＋株式会社計画・環境建築

生徒総数20数名の山間の小さな小学校。建築の美しさと、その中で繰り広げられる行き届いた教育は、子どもたちの温かい心を膨らませるに違いない。

1995年　第1回くまもとアートポリス推進賞

清和物産館（四季のふるさと）（清和村）

■事業主：清和村
■竣工：平成6年3月
■設計者：株式会社石井和紘建築研究所

文楽館と一体として構想された施設である。両側面の柱が円弧形を平行移動させた曲線上に配置され、その上に並行した、いわゆる割り箸構造の合掌が平行に並べられている。清和村を活性化する核として多くの来館者を集めている。

1995年　第1回くまもとアートポリス推進賞

東陽村石匠館（東陽村）

■事業主：東陽村
■竣工：平成5年12月
■設計者：木島安史＋株式会社計画・環境建築

かつて数々の眼鏡橋を造った肥後種山の石工のふるさと東陽村に建てられた、眼鏡橋に関する資料館である。中国から石工を招聘し、容結凝灰岩を積んだ上に木の屋根を載せている。資料館の運営並びに維持管理の努力も評価される。

1995年　第1回くまもとアートポリス推進賞

荒瀬ダムボートハウス

■事業主：坂本村
■竣工：平成7年3月
■設計者：桂英昭＋（有）ＡＩＲ

高校・大学のボート部の合宿所で、競技中は本部・観覧場に、普段は近隣住民の集会などにも利用されている。湖に沿って　100m近くも一直線に伸びる木造建築で、白ペンキ塗りの瀟洒な外観は端正な力強さを印象づけ、周囲の自然と調和している。

1995年　第1回くまもとアートポリス推進賞

八代広域行政事務組合消防本部庁舎（八代市）

■事業主：八代広域行政事務組合
■竣工：平成7年4月
■設計者：株式会社伊東豊雄建築設計事務所

消防署としての機能を重視すると共に、市民に開かれたオープンな施設とするために、建物全体が高いピロティーで空中に持ち上げられている。その軽やかな印象は公共建築の新しい姿を生んだ。八代の誇りとして人々に馴染んでいくことが期待される。

1996年　第2回くまもとアートポリス推進賞

社会福祉法人 慈愛園ノーマンホーム（熊本市）

■事業主：社会福祉法人　慈愛園
■竣工：平成7年8月
■設計者：一級建築事務所　かわつひろし建築工房

本施設は9000坪の敷地内の一施設で、園の雰囲気を壊さぬよう、また後に続く同園内の他の建築にある種のルールを提案するかたちで計画された。壁を少ないため透明性が高く、まなざしが子どもたちに向けられ、またその存在を子どもたちに感じられるようにと意図している。

1995年　第1回くまもとアートポリス推進賞

出田眼科病院（熊本市）

■事業主：医療法人出田会　出田眼科病院
■竣工：平成6年9月
■設計者：株式会社ＮＴＴファシリティーズ九州支店一級建築士事務所

76年の歴史の中で培った医学の技術の上に立ち、地域に密着したアメニティー・ホスピタルを目指すという院長の方針のもとに建てられた。施設の一部を開放したり、バリアフリー化を追求するなど、近隣社会への貢献やつながりにも細かい配慮が見られる。

1996年　第2回くまもとアートポリス推進賞選賞

阿蘇白水温泉「瑠璃」（白水村）

■事業主：白水村
■竣工：平成8年3月
■設計者：杉本洋文／（株）計画・環境建築

前面広場のテンセグリティ構造の木造塔を中心に2つの施設を直交する軸で配し、平行する各棟はそれぞれ特徴を持った木組みで造られている。木造建築を採用することにより地域の産業の活性化を試みている。また、村の新しい交流ゾーンを形成しつつある。

1995年　第1回くまもとアートポリス推進賞

尚玄山荘

■事業主：有限会社有明総業
■竣工：平成5年12月
■設計者：株式会社竹中工務店九州支店設計部

温泉保養所・宿泊施設で、観光客ばかりでなく、地域住民や障害者にも親しまれている。人工の水盤のような庭と日本式庭園の間にあり、ガラス壁越しに様々な外部空間を感じとることが出来る。瓦葺きの大屋根は単純で清潔な外観を引き締めている。

1996年　第2回くまもとアートポリス推進賞選賞

ふるさとセンター Y・BOX（横島町）

■事業主：横島町
■竣工：平成8年3月
■設計者：設計計画・石丸事務所

直線的なデザインは、干拓で直線的に開拓してきた町の歴史を意識したもの。三角形を組み合わせた屋根と列柱は平坦な地形にリズミカルな変化を与え、変化に富んだ内部空間を造っている。深い軒下は、朝市、特産品バザーなどの様々な催しで賑わっている。